

第八課

あくまで頼み続けるなら

神の友の大胆さ

「また、イエスはこう言われた。『あなたがたのうち、だれかに友だちがいるとして、真夜中にその人のところに行き、『君。パンを三つ貸してくれ。友人が旅の途中、私のうちへ来たのだが、出してやるものがないのだ。』』と言ったとします。すると、彼は家の中からこう答えます。『めんどろをかけないでくれ。もう戸締まりもしてしまっし、子どもたちも私も寝ている。起きて、何かをやることはできない。』あなたがたに言いますが、彼は友だちだからということでききて何かを与えることはしないにしても、あくまで頼み続けるなら、そのためには起き上がって、必要な物を与えるでしょう。」

(ルカ一・五一八)

主は、山上の説教によって、弟子たちに最初の教えを授けられました。弟子たちがイエスに祈りを教えてくださるよう求めたのは、それからほとんど一年後のことでした。そこで主は彼らの求めに応じ、再び主の祈りをもって、何を祈るべきかをお教えになりました。次に主は、どの

ように祈るべきかについて語られ、また、神が父であられることと、祈りの確かさについても一度繰り返されました。ただ、この二つの教えの間に、主は、夜半に訪れた友人についての美しいたとえ話を付け加えられ、二つの学課をお教えになりました。一つは、自分のためばかりでなく、自分の周囲にいる滅び行く人々のために祈ることです。もう一つは、このようとりなしの祈りの際に、大胆に願うことの必要ということです。しかも、そうすることは神の喜ばれることなのです。

このたとえ話は、本当のとりなしの祈りに関する教えの完全な宝庫です。第一に、自分の周囲の困っている人々を助けようとする愛があります。「友人が私のうちへ来た。」それから必要の叫び声があります。「出してやるものがないのだ。」それから、助けてもらえろという安心感があります。「あなたがたのうち、だれかに友だちがいるとして、真夜中にその人のところに行き、『君。パンを三つ貸してくれ……。』ところが、意外にも拒絶されてしまいます。『めんどろをかけないでくれ。起きて、何かをやることはできない。』」続いて、拒まれてもいっこうに気にしない堅忍不拔の精神が見られます。「あくまで頼み続けるなら。」そして最後に、このような祈りには次のような報いがあります。「必要な物を与えるでしょう。」このたとえ話は、祈りと信仰のすばらしいあり方を示しているものではないでしょうか。神の祝福は、そのような祈りと信仰の中でこそ、求められ、見出されるのです。

祈りは神の親愛への訴えです。このことをしばらく考えてみましょう。特に、二つのことが暗示されているように思います。一つは、もし私たちが神の友であり、そのような立場で神のみとに來るのだとすれば、私たちは、困っている人々の友であることを証明しなければならぬということです。神の私たちに對する親愛と、他の人々に對する私たちの親愛とは切り離すことはできません。もう一つは、私たちがこのようにしてみもとに來る時には、答が与えられることは間違いないということです。

祈りには、二重の用途があります。一つは、自分のために力や祝福を得ることです。もう一つは、より高い、本当の祈りともいうべきとりなしです。それによってキリストは私たちを御自身の交わりと、御自身の教えとにあずからせてくださいます。その祈りは、神の子が天において、他の人や神の国のために用いる、特別な力です。アブラハム、モーセ、サムエル、エリヤ、その他の昔の聖徒たちはすべて、とりなしの祈りの中で神の力を与えられ、忍耐をもって祈り続けたことが、聖書に明らかにされています。私たちは、他の人の祝福のために自らをささげる時に、特別に神の祝福をいただくことができます。あわれな、滅び行く人々の友となつて神に近づく時、神は私たちの友となつてくださいます。貧しい人の友である義人は、真に神の特別の友です。このことが、祈りにすばらしい自由をもたらします。主よ。困っている友がいます。何とかしてやらなければなりません。私は、友人として手を貸そうとしました。あなたは私の友となつ

てくださる方です。あなたの優しさと豊かさは無限です。あなたは、私が求めるものをきつと与えてくださいます。私は、罪深い者ですが、友のためにできるだけのことをしてやりたいと思っています。もしそうなら、天の友であるあなたは、なおのこと、御自身の友に求めるものを与えられないことがあるでしょうか。

神が父であるということが祈りにそのような確信を与えるのであって、神が友であるということとはそれに及ばないのではないかという疑問が起るかもしれません。しかし、よく考えると、神を友として嘆願することは、私たちに新たな驚きをもたらすことであることが分ってきます。子が父に求めたものを得るということはごく自然のことです。父がそうすることは親としての義務と考えられないことはありません。しかし、友として与える場合は、その親愛はもつと自由なものであって、自然なものというより、その人の同情とか性格にかかわるものです。子供の場合は完全に依存の関係ですが、友人の場合となると、ほとんど同等の関係です。そこで主は、祈りの霊的奥義を私たちに示すにあたつて、御自身の友と認める者、すなわち、その心と生活が主と一致している者として、私たちがこの関係に立つて神に近づくことを喜んで許してくださるのです。

もしそうだとしたら、私たちは主の友として生きていかなければなりません。私たちはまだ子供であつて迷いやすいものです。しかし友という関係は行い次第です。「わたしがあなたがたに命じることがあなたがたが行なうなら、あなたがたはわたしの友です。」「あなたの見ているとお

命じることがあなたがたが行なうなら、あなたがたはわたしの友です。」「あなたの見ているとお

り、彼の信仰は彼の行ないとともに働いたのであり、信仰は行ないによって全うされ、そして、『アブラハムは神を信じ、その信仰が彼の義とみなされた。』という聖書のことばが実現し、彼は神の友と呼ばれたのです。」「私たちが神に受け入れられたことをあかししてくださる御霊、その「同じ御霊」が、祈る時に私たちを助けてくださいます。それは、ためらうことなく次のように言える、神の友としてのすばらしい生き方です。私には、真夜中でも訪ねて行ける友がいます。それだけではありません。私は、親愛にあふれた心で神の親愛をこの身で現しつつ、自分が神にしたいと思うような仕方では友を助けたいと思います。神のみもとに行って祈る時に、神は恵まって私が何を指して祈っているかをご覧になります。自分自身の慰めや喜びのために神の恵みを求めているとすれば、それは与えられないでしょう。しかし、他の人々のために神の祝福を求め、ただ神の栄光がたたえられることが主目的であるなら、私の願いはむだにはなりません。ただ、他の人々のために願うにしても、その人々を助けるのに、自分が犠牲を払うことをせず、信仰による行動を起そうとせず、神が自分を豊かにしてくれるまで待つという気持ちでいるなら、答は与えられないでしょう。しかし、困っている友のために行動を起し、自分の貧しさを顧みずに、自分には自分を助けてくれる友がいるということで、愛のわざを始めるなら、その祈りは聞かれます。ああ、私たちは、願いがいかに有効であるかについてあまりにも知らなすぎるのです。この地上の親愛の欠けたところを、天よりの親愛に期待したいものです。」「必要な物を

与えるでしょう。」

しかし、必ずしもすぐに与えられるとは限りません。神をあがめ、神を喜ぶ唯一の手段は信仰です。とりなしの祈りは、信仰の訓練学校の一課程です。そこで、人と神に対する私たちの親しい関係が試されます。困っている人への私の友情が確かなものかどうか、喜んで自分の休息を犠牲にしても時間を作ろうとするかどうか、夜中にまで出かけて行って、彼らのために私が必要としているものを獲得するまでがんばるかどうかということです。また、神に対する私の友好関係は非常にはつきりしていて、神が見捨てることはあり得ないと信じ、答をいただくまで祈り続けるかどうかということです。

これは辛抱強い祈りについての、なんと深遠な奥義でしょう。神は祝福を約束され、それを与えようとしておられます。祝福を与えることが神のゆるぎない目的です。しかし、その答を延される場合があります。そのことは、神にとっては非常に重要なことで、神の地上の友は天の豊かな友を知り信頼しなければなりません。すなわち、神は、遅れた答という学校で彼らを訓練し、彼らの辛抱強さがどのくらい続くものなのか、彼らが天において使用できる力がどんなに強力なものであるかを明らかにしようと言われます。自分たちは、ただそれに身をゆだねればよいのです。信仰によって約束を見、それを喜び迎えても、なお約束のものを得られない場合があります（ヘブル一・一三、三九）。祈りの答が得られず、最も頼りにしている約束は、果される気配す

す（ヘブル一・二三、三九）。祈りの答が得られず、最も頼りにしている約束は、果たされる気配す

らない時、それは金よりも尊い試練の時なのです。この試練の時にこそ、約束を喜び迎えた信仰がきよめられ、力づけられ、生ける神との個人的な聖い交わりが整えられ、神の栄光を拝するようになります。それは、約束が文字通りに成就して、目には見えなくても生きていらっしやる神の生ける真理として実現するまで、約束を握り続けることを教えます。

愛のわざをもって御父に仕えたいと願っている神の子たちは勇気を出しなさい。子を持つ親、クラスを持つ教師、地域を受け持つ訪問伝道者、サークルを受け持つ聖書教師、会衆を持つ説教者は、それぞれの小さなサークルの中で、飢えた、減び行きたましいに重荷を持っています。彼らを勇気づけなさい。初めのうちは、神が辛抱強い祈りを求めたり、私たちが霊的にしつこくなったりすることが必要だということは、とても奇妙に思えます。主は、それを私たちに教えようとして、この全く奇妙なたとえ話をお用いになりました。この世の自己中心的な友人のつれなさも、しつこきによって征服できるとしたら、なおのこと天の友にそのしつこきは通じるはずです。私たちが霊的資格を欠き、神が与えてくださるものを所有する力がないために、答が延されることがあります。だから、答が延されることをも感謝しましょう。主は私たちを教育し、私たちをあるべき立場にまで引き上げ、神が与えられる力を完全に行使することができるようにしてください。主はまた、私たちを訓練し、疑うことのない信仰と信頼にもとづいた主との交わりに生きるようにしてください、真に神の友とならせてください。切れることを知らな

い三本のより綱をしつかりと握っていきましょう。三本のより綱とは、助けを必要としている飢えた友、助けを求めて祈っている友、そして、必要なものを喜んで与えてくださる大能の友です。

ああ、恵み深い主、また教師よ。私は祈りによってみもとに近づかなければなりません。あなたの教えは輝かしいのですが、私には程度が高すぎて理解できません。私の心はあまりにも小さく、あなたの御父を私の友とするというような大胆な考えをとうてい悟り得ないことを告白しなければなりません。主イエスよ。みことばとともにあなたの御霊をお与えください。そして、私の心の中に、みことばを、生きた、力あるものとしてください。「あくまで頼み続けるなら……必要な物を与えるでしょう」というきょうのみことばを守りたいと願っています。

主よ。辛抱強く祈る祈りの力を知ることを、更に教えてください。御父は、私たちが求めている時に御自身を現して、内なるいのちが成長し、成熟するようにしてください。それは、主の恵みが同化して私たち自身のものとなるためです。主は、その強い信仰を実行できるように、喜んで私たちを訓練してください。その信仰は、気落ちしそうな時にも、主を離しません。主は私たちを引き上げ、あのすばらしい自由にあずかせようと望んでおられます。その自由にあずかる時に、主が、いかに私たちの祈りに応じて賜物を与えられるかを理解できるのです。

主よ。私はそのことを知っています。どうか私を教えて、霊と真をもってそれを見る者とならせてください。天の富める友のしもべとなることが私の喜びとなり、私をして、すべての飢えている人々、滅び行く人々を顧みる者とならせてください。たとい真夜中であっても、辛抱強く祈る者に、そのしつこさのゆえに答えて必要なものを与えてくださる友が私にはいるからです。アーメン。